

2019. 7. 7. 聖霊降臨節第5主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書3章1-20節

『洗礼を授ける』

新約聖書の四つの福音書、そのどの福音書にも冒頭部分で登場する一人の人物がいます。その扱いは福音書の中では破格です。その人の名前はヨハネ。ヨハネという名前は当時、多くいたようですが、彼はヨルダン川で人々に悔い改めの洗礼を授けていたことから、洗礼者ヨハネ、と人々から呼ばれていました。福音書の中にはいろいろな人物が登場します。主イエスに敵対する人物や、主イエスに従い、弟子となったもの、さまざまな人物が登場する中で、洗礼者ヨハネに対してきわめて丁寧に、大事な人物として、報告し書き記しています。例えば、ルカ福音書などは、ヨハネの生まれてくるいきさつから書き記しているのです。こんなことは12弟子ですらないことで、いかに破格なことか、それだけでわかるのです。

それだけでなく、ヨハネは聖書の読者からも支持され、親しまれてきました。ヨーロッパをはじめ、多くの国でヨハネというギリシャ語を源泉とする名前、例えばフランス語であれば、「ジャン」、(カルヴァンの名前はジャン・カルヴァン)英語であればジョン(ジョン・F・ケネディ)、ロシア語であればイワン、ドイツ語であればヨハン(ヨハン・セバスティアン・バッハ)という具合に多くの人がヨハネとつけているのです。

朗読された聖書箇所は、長い箇所ですが、ここは大きく三つの部分から成っています。一つは、1節から6節までの記述で、ここには、ヨハネが荒野で聞いた神の言葉が語れています。ヨハネは神の言葉を聞く。そしてそこから彼の活動は始まりました。それは、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えていく、ということでした。神の言葉を宣べ伝え、悔い改めの洗礼の活動をしていた。

ヨハネが聞いた神の言葉、それは預言者イザヤが神から聞いた言葉と重なり合うもので、それが4節から6節に語られています。今回、あらためてここで読んで、ここは、誤解されて読まれがちなところではないかと思います。「荒野で叫ぶ者の声がある。」この声とはだれの声なのか。ヨハネが自分のことを言っているのでしょうか。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」整え、まっすぐにするのは誰なのか。ヨハネがそれをするのか。そうではない。荒野で叫ぶ者の声とは、2節にあるように、神の言葉なのです。神の言葉が、主の道を整え、その道筋をまっすぐにするのです。

主の道というのは、神と人間を繋ぐ道と言っていいものです。主の道というのがわたしたちと関係なく一筋、天上にある、というのではない。神と人間をまことにつなぐ道、それを整え、その道筋をまっすぐにする必要がある。なぜならその道を人間の方で、崩壊させ、寸断させてしまったからです。道がなくなってしまった。その道を整えて、道筋をつけて行かなければならない。「谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人はみな、神の救いを仰ぎ見る。」

「ポツンと一軒家」というTV番組があります。あれを見ていると、ほんとうにどうしてこれほどの山奥に住んでいるのか、と思うようなところが毎回出てきます。しかし、どんな家も、そこに行く道があるのです。道がなくすべて遮断されて、ただ一軒家、というのではないのです。わたしたちが神を仰ぎ、神の言葉に聞き、神と交わるためには、道が必要なのです。その道を整え、道筋をまっすぐにするのは、神の言葉、すなわちイエス・キリストなのです。イエス・キリストによってだけ、谷はすべて埋められ、山と丘は低くされ、曲がった道はまっすぐに、悪路も平坦な道になるのです。イエス・キリストの方が架け橋になるようにして道ができる。それによって、人は神の救いの業をまこと仰ぎ見ることができるようになる、そういう言葉を、ヨハネは聞くのです。

そしてさらに、7節から14節までのところで、ヨハネの語る教えが記されています。ヨハネは「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」と語るのです。蝮の子らよ、というのは聞いてわかるように、悪い表現、神に敵対する者らよ、という意味です。先ほどの話で言えば、道を自分から遮断してしまった者、神の前で自分の罪を悔い改め、その悔い改めにふさわしい実を結べ、それがヨハネのメッセージの骨格です。神との関係を自分の方から遮断してしまった者よ、神の前での自分の罪に気づき、悔い改め、それにふさわしい生き方をしなさい。このヨハネのメッセージに対して、彼のもとに集まってきた人々の中から群衆と、徴税人と、兵士がそれぞれしかし全く同じ質問をします。群衆は、ふさわしい実を結べ、と言われて、「ではわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは応えて、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っているものと同じようにせよ。」ヨハネの答えは、宗教的な祈りや修行を重ねろというようなものではありませんでした。まったく日常的な社会正義、困っている人に、自分の持てるものを差し出せ、というようなことです。徴税人も同じように尋ね

た。するとヨハネは「規定以上のものは取り立てるな」と答えた。これもまた徴税人にとっては、日常的なこと。当時規定以上に取り立てる輩が少なからずいたにせよ、倫理的にも当然のこと。兵士たちの同じ質問に対してもヨハネは「誰からも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ。」と応える。ヨハネは神の前で悔い改めて生きることを、とてつもなく高いハードルをクリアせよ、と言ったわけではなかった。むしろ人として、真っ当に、社会正義を自分のできる仕方実践し、倫理的に、当たり前なことを当たり前に行え、と語ったのです。ヨハネの教えは、神の前で自分の罪を悔い改めよ、そしてその悔い改めたものとして、真っ当に生きよというものだった。この教えは人々にわかりやすく、誠実で、真摯なものであり、ヨハネのもとに多くの人々が集まってきたのも、うなずけるのです。

救い主の到来を待ち望んでいる民は多くいたのですが、中に、ヨハネこそ、我々が待ち望んでいる救い主ではないか、と思う人々が当然いました。ヨハネは自分に対するそのようなまなざしを感じて、わたしより優れた方が来られる、わたしはその方の履物の紐を解く値打ちもない。わたしとは比べ物にもならない。わたしは水で洗礼を授けるが、その方は聖霊と火で洗礼を授ける。そうイエス・キリストのことを語りました。同時代的には、ヨハネの方が多くの人たちを集めており、ヨハネのグループ、ヨハネ教団はイエスのグループよりも大きなものだったといえます。しかしヨハネは自分が何者か、ということ冷静に判断できる人であり、じぶんは救い主というような存在では全くないことを自覚していました。それは決して当たり前なことではなく、宗教的な集団のトップに立てば、誰もがそのような誘惑の中に陥るのです。ヨハネの教えと主イエス・キリストの教えとは教えの方向性が違います。ましてヨハネはイエス・キリストの十字架と復活を知ることなく、死んだ人です。キリストの言葉も、わざも、知らないのです。キリストが自ら十字架にかかり、わたしたちの罪を担ってくださったことを知らないのですから、そしてそのキリストの十字架によってわたしたちの罪がゆるされることを知らないのですから、悔い改めの洗礼を宣べ伝えたのも、当然といえば当然でした。しかしどんなに悔い改めたからといって、それによって、神と人との間の道が繋がるかどうか。わたしたちが反省すれば、その罪がゆるされるかどうか。ヨハネの教えの言葉は虻の子らよ、と呼びかける激烈なものでしたが、彼の語るその教えで、人間の罪の問題が本当に解決したか、そのことはヨハネ自身がよく知っていたのではないかと。ヨハネは自分は救い主ではない、ということを知っている人であり、自分が行う洗礼と、イエスが行う洗礼は全く違う、ということを知っていた人でした。自分が行う洗礼は水による洗礼で、いわば清めの儀式でした。しっかりと悔い改めて、

もう一度やり直していく、その清めの儀式でした。しかし、主イエスの洗礼は、火によって焼き尽くされるように古い自分に死に、霊によって新たにされる、新生へと向かう洗礼なのだ、ということも感じていました。おそらくヨハネ自身が、人間の罪の問題は悔い改めだけではどうにもならないものだ、ということを感じていたのではないかと、思います。

ヨハネはキリスト以前、いわば旧約聖書の最後に立っている人です。ヨハネの教えも清めの行為も、キリスト以前の、ものです。しかしヨハネはイエス・キリストの存在を知らされ、この方こそが救い主だと預言した、最後の預言者と言える人です。旧約の最後に立って、新約のキリストを指さした人だったのです。

ヨハネの偉大さは、彼の教えや、彼のなした洗礼にあるのではない。彼の偉大さは、神の言葉によって自分に与えられた役割を知り、まことの救い主を指さし、わたしは救い主ではない、じぶんはあの方の前に遣わされたものにすぎない、ということを知っていた、ということにあるのです。まことの救い主がやってくる。いやすでに来ている、その方によってこそ主の道は整えられ、谷はすべて埋められ、神への道はまっすぐになる。この方によってこそ、神の救いを人は仰ぎ見ることができる。そう預言したヨハネは、まことに優れたイエス・キリストの証し人、その意味で彼は旧約の最後に立っていると同時に、新約のキリスト者の在り方を身をもって指示した最初の人といえるのです。

D a t a : 聖霊降臨節第5主日礼拝式説教

讃美 : 前237、後534

新生教会礼拝堂